

## ミサを生きる (17)

### 【感謝の典礼】(3)

#### ■奉納祈願

「供えものの奉獻とそれに伴う儀式が終わると、司祭とともに祈るようにとの招きと奉納祈願によって、供えものの準備が完了し、感謝の祈り（奉獻文）の準備が整う。」

（「ローマ・ミサ典礼書の総則」 77）

奉納はイエスのみことばに応える私たちの応答でもあります。みことばを聴くことは、みことばに応える生き方へと私たちを招きます。イエスのみことばに応じて生きたいという思いが、私たちの生活を変えていくのです。私たちの生活は方向性を持たない日常の単調な繰り返しから、主イエスとともに歩む、父なる神への献身の生活に変えられていくのです。

イエスがその生き方を通して教えておられるように、私たちの生活のすべては、父なる神からの私たちへの恵みであり、私たちに託された父なる神からの使命です。そのすべてを感謝のうちに受け止め、味わい、与えられていることへの感謝をささげるのです。

奉納において私たちがささげるものは感謝の具体的しるしです。すなわちそれは、私たちの生活になくってはならない食べ物と飲み物であり、生活を支える経済です。これらの生きるためになくってはならないもの、つまり、私たちの具体的生そのものを、私たちは父なる神に負っているのです。そのことへの感謝は、私たちの生そのものを感謝のうちにささげることなしには、表しえないこととなります。そうでなければ、私たちは神の恵みのうちに生かされている自らの存在の根拠を無視することになり、父なる神に与えられているものを私物化することになってしまうのです。

イエスは、このような私たちの根源的ありようを、その生き方を通して、私たちに示してくださいました。父なる神への私たちの感謝のささげものは、イエス・キリストの十字架の奉獻に結ばれることによって、単なる感謝の気持ちのしるしを超えて、私たちの生活

そのものの奉献のしるしとなるのです。

司祭が奉献の終わりに、沈黙のうちに唱える祈りのうちにそのことがはっきりと示されています。「神よ、心から悔い改める私たちが受け入れられ、きょう、み前に供えるいけにえも、み心にかなうものとなりますように」。ミサに参加する私たち自身が、イエス・キリストの十字架の死と結ばれて、神へのささげもの、いけにえとなるのです。こうして私たちは自らのいのちをささげて、神と他者のために生きたキリストの生き方に結ばれていくのです。

(「ミサの鑑賞—感謝の祭儀をささげるために」吉池吉高 オリエンズ宗教研究所 参照)